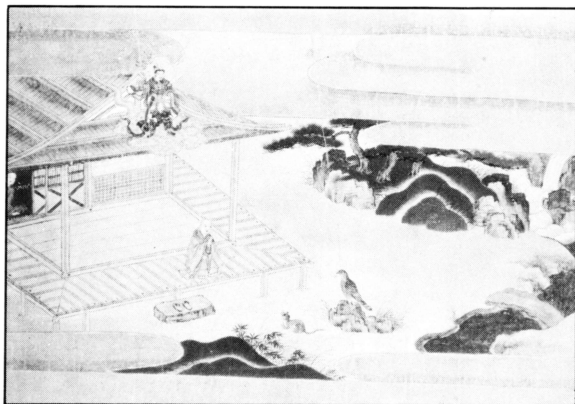




起縁仏通融

ねんぶつおうじょう せいがん びょうどう じひ じう
念仏往生の誓願は平等の慈悲に住して、おこしたまい
たる事にて候え、人をきらう事はまたく候わぬなり。
こと そうら ひと こと さくら

——拾遺和語燈録 卷上——

最近「差別戒名」の存在が明らかに、問題になっていきます。これは被差別部落の人びとに、死後もそれとわかる戒名をつけたものです。日本の仏教史のなかでも、最も恥ずべきことです。

法然上人は、念仏の教えの根底にあるのが平等ということだと説いておられます。

人の職業や身分の違い、男女の差によって阿弥陀さまの救いに差別があつてはならないのです。というより、阿弥陀さまの大慈悲心の前においては、どんな人も全く何の差異も消えてしまうのです。

人と生まれ、悩み苦しみ、やがて「死」に帰っていく自分に気づいた人が、「助けたまえ！」と念仏する時、阿弥陀仏は誰彼の差別なく、ただちに抱きとめてくださるのです。



起縁仏念通融

弥陀の浄土に生まれんとおもはんものは、
弥陀の誓願にしたがふべきなり。

法然上人ご法語

ある娘さんがお嫁に
いく時、聞かせてくれ
たことばが忘れられま
せん。

「私は親から実に多
くのものをもらいました。小さい時に買ってもらった洋
服や着物、このたびの結婚の仕度、学問や健康な体など、
みんな親からもらったものです。その中で私が一番気に
入ってうれしいのは「しのぶ」という名前です。両親の、
私への願いがこの名前にこめられているようで、一生大
切にして生きてゆきたいと思っています。」

自分の名前には親の願いがこめられていると知った時、
こどもはその名前を誇りにし、また親の深い愛情を思わ
ずにはおれません。

念仏には仏さまの「撰取不捨」という誓いと願いがこ
められています。目に見えぬ大きな命と一つになれよと
たえず呼びかけてくださっている仏さまの願いに「はい、」
と答える姿が「南無阿弥陀仏」であるのです。

仏さまの願いの中で、正しく幸せな人生を歩みたいも
のです。



声こえ即すなわちこ是ねんれ念ねん。

念ねん即すなわちこ是これ声こえ。

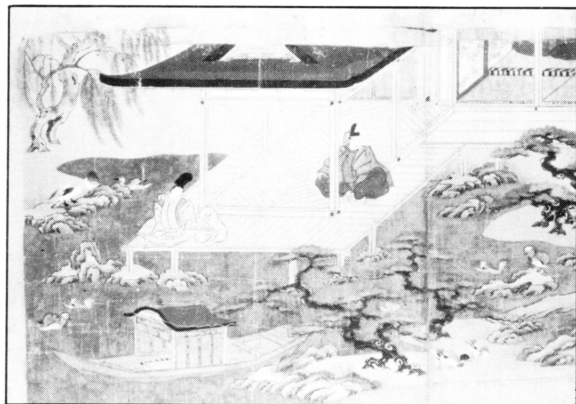
選撰本願念仏集 第三章

「ごごと念仏」という落語があります。仏壇に向ってお念仏を称えているご隠居さんが、そのあい間に、お婆さんを叱りつけたり、ごごとを言ったりというものです。

こんな気のぬけたお念仏でさえ、ナムアミダブツのお念仏に、すでに功德を積んであるという事です。

声に出すのも、心で頂くのも、念仏であることにちがいはないのです。大切なことは、私たちは今この瞬間、この瞬間の連続の人生を、念仏という破れ去ることのない衣にすっぽりと身を包まれて生きていくことではないでしょうか。

そして、その念仏の日暮しという行をするためにこそ、み仏は私達をこの世に生れ遣わされたのだと気づかせていただくことです。



起縁仏念通融

仏も衆生もおや子のごとく

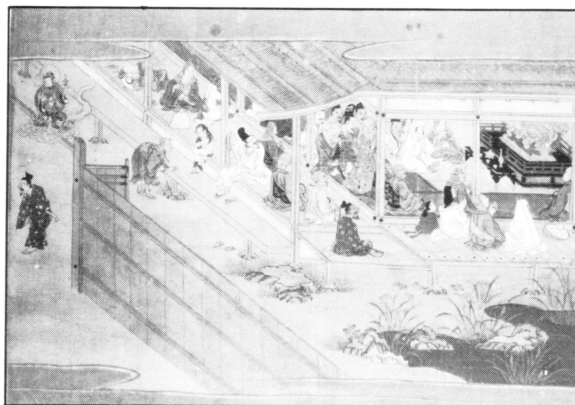
なるゆへに親縁となづく

——法然上人御法語——

あなたは、母のやさしさに気づいたことがありますか？ そして、はじめて母のやさしさに気づいたのはいつの頃ですか？

この私が生まれてくるとき、父や母、たくさんの人々に見守られ、愛されて生まれてきました。いつしかその大いなる慈しみを忘れてはいないでしょうか？——血のなかに脈々と息づく、絶対なやさしさと、私を抱んで離さない深い眼差しを。私の一つ一つの動作・言葉・想いが、父母を通して、祖父母を通して、大いなる生命のはからいのなかで動いていることを、まだ知らないでいるとしたら生きている価値を知らないことになりました。

全ての生きとし生けるものを抱んで離さない、限らないやさしさを弥陀といい、日本で最初に気づかれたのが法然上人なのです。



融通念仏縁起

弥陀は、持戒・破戒を簡ばず、

有知・無智を論ぜず

法然上人ご法語

笑い話に、

おぼれている人を見て、これは大変
とばかり、水の中へ飛びこんだまては
よかつたが、「アッ、おれは泳げない
んだ！」というのがあります。

しかしながら、おぼれている人を目の
当りにして、自身の生命の危険も顧みず、そのような人
を「救わずにはおれない心」に私たちは思いをいたすと
き、そこに「救い」の真のすがたを見る思いがします。
と同時に、人が人を救うことのいかに難かしいかを、感
じないわけにはまいりません。

このように考えますと、次のようなことが素直に分か
つていただけるのではないのでしょうか――

人の歴史が続くかぎり、「いつ・いかなる所であろう
とも、私の方から必ずあなたを救いに向こうぞ」と誓
われて、救わずにはおかぬとする「慈悲のみ心」と、そ
のための「智慧」を具えられた絶対覚者が、この「私」
のためにおられるのだということが。そして、さればこ
そ阿弥陀仏の生命が永遠であるということも。



起縁仏念通融

わが心の程もおもひしられ、人のうえを見るに、
この人目をかざる心ばえの、いかにもくおもいはなれぬこそ、
返す返す心うくかなしくおぼゆれ。

—— 法然上人ご法語 ——

衣服を飾り、住家を飾り、言葉を飾り、それでも足らずに社会的地位で自分を飾り、少しでも自分がすぐれた人間であると他人に見られたいと思う。考えてみると、そうした「人目をかざる」ために私たちは人生の大半を費してしまっているのではないだろうか。

その間心の方は留守の状態。生来のいびつな石ころのようなわが心を、みがきあげることもなく、空しく人生を過してしまつては、とりかえしがつきません。

「まめやかに仏の意（こころ）にかなわん事をおもう」という真実の・心のシェイプ・アップこそが、念仏の教えなのです。

多生曠劫をへても

生まれがたき人界に生まれ

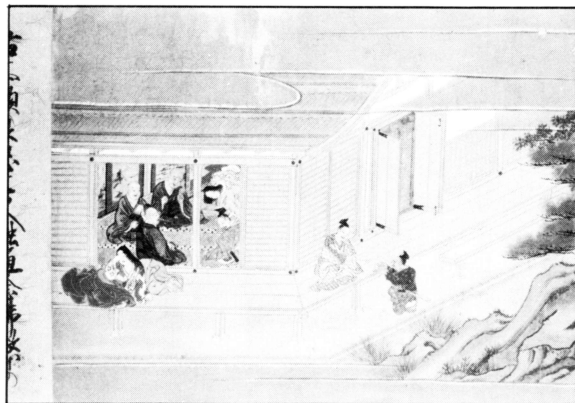
法然上人ご法語

あなたは「死」に直面したこと
が、おありですか、家族や知人の未
期に。

私自身必ず出くわす「死」とい
う体験を、どうむかえるか、そし
てどうのりこえるか。

人生は苦であり、寂しいところです。その苦悩の
なかのひとつに「愛別離苦」があります。愛する人
いとおしいものと別離する苦しみ。しかしほんと
うにそうでしょうか。私は思うのです。父や母、妻
や子の、あらゆる人々のあらん限りの愛情に抱かれ
た私に目覚めたとき、如来さまの大慈悲がこの私一
人にそそがれている忝なさとうけとめられた、未練
ではない、そういう真の名残り惜しさをいうのでは
ないだろうか。

平生に死を臨み、忝なさに喜ぶ心を信心といい、
世にこれ程強い生き方はないのです。





融通念仏縁起

昨日もいたづらにくれぬ

今日も又、むなしくあけぬ

——法然上人ご法語——

「ああ、あ、何時の間にか、こんな年令になってしまった。」
と、あなたは思う事はありませんか。

私たちは、年若き時には、はやく成人したいと思ひ。年若いとは、いつまでも、若くありたいと願うものです。人間の歴史は、その繰返してありましよう。時間は常に同じ間隔であります。しかし、それが年令と共に、その間隔が短くなり、スピードをあげて行くようになりません。

さて、あなたは命終の時、閻魔大王の問、「汝、仏法流布の世に生まれて、何ぞ、修行せずして、いたづらに帰り来たるや。」

その時、あなたは、何んと、お答えなさいますか。

人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり。
南無阿み陀佛とかみて、南無阿み陀佛とのみ入べきなり。

勅修御伝



去正嘉の頃疫癘にちく人いづく病
死なり其時武蔵國ら野郷ふ一人

融通念仏縁起

人間の平均寿命は年ごとに延びています。昔は人生五十年と言われていましたが、今は八十才近くになっています。人生八十年といいますが、これもこれあくまでも平均寿命にすぎません。あてにならないのがこの私の「生命」です。

これだけコンピュータが発達している現代、その人の身体の状態からあなたの生命はあと何年ですと、数字にあらわれてきても不思議ではありません。しかし本当にそれができないのが私たちの生命なのです。間違いないのは今ここに生きている私だけなのです。

人間の死亡率は百パーセント。いつかは浄土へ帰らねばなりません。いただいた生命の一瞬一瞬が、お念仏の生活の連続でありたいものです。



融 通 念 仏 縁 起

煩惱は身にそえる影 去らむとすれど去らず

菩提は水に浮かべる月 取らむとすれど取れず

—— 法然上人ご法語 ——

法然上人は――

「私どもというのは、口に経を読み、身に仏を礼するという、そのような時であっても、心の中には思ってはならぬことばかりが、片時の休みもなしに次から次へと起こってくる。

また悲しいことに、年をとるにつれて善心は薄らぎ、日を追うにつれ悪心が深まっていく。」

と、このように見ておられます。

右のような身を乱想らんそうの凡夫はんぶといいますが、法然上人はへ乱想の凡夫の身を肯定された上で、「乱想の身であつては、どうして覚りが得られようか」と私どもに静かに問いかけ、さればこそ、弥陀の救いを措さいて、私どもの往生の道はない、と説かれるのです。ここの所を味わってみたいと思います。



融通念仏縁起

一生涯の定まりなき事、夢のごとし幻の如し。

あしたとやせん。暮とやせん。たれか定めん
今日その日にあらずとは――。

勅修御伝第十五

いう言葉です。生命に限りがあればこそ、だれでも不死を願うのですが、仮りに人間みな無限に生き続けなければならぬとすれば、この世は人間（しかも老人ばかり）で充ちあふれ、なんとも耐えがたい苦しみになりがいありません。

某師は自分の弟子に「お前も死ぬぞ」と書いて与えたそうです。弟子たちはそれを仏壇に張りつけて、朝な夕な、手を合わすたびに、「そうだ、おれも死ぬんだ。あすはもう生きていないんだ。きょう一日を力いっぱい悔いのないように生きなければ」と決心したそうです。

ほんとうに、私たちはいつ死ぬか知れぬ身です。しかも、それは一生一度しかないのです。であればこそ、「強健有力の時、自策自励」しなければなりません。健康にめぐまれ、元気な時に、一生涯の一大事を自分で考え自分で解決しなければならぬのです。

「人間はなぜ死ぬのでしょう。生きたいわ、千年も万年も生きたい」
浪子が『不如歸』の中で最後に